

# サイゴン新世代がつくる「英雄」たち

## 現代ベトナムにおけるヒーローアクション映画をめぐって

坂川 直也

### はじめに

ベトナムは「詩と竹と英雄の国」と言われている。当然、ベトナム映画においても詩と竹と英雄は欠かせない要素である。特に英雄(Anh Hùng)は、「抗米・祖国統一」という戦意高揚を目的した国策の戦争プロパガンダ映画の時代から、ベトナム映画が長年拘泥してきたテーマだった。社会主義国(主にソ連、中国)から輸入した英雄像をもとに、ベトナムで「新英雄」が発明され、崇拜(Cult)していく過程を分析したブノワ『ベトナムにおける英雄たちと革命』によれば、「新英雄」たちに関する映画の制作は1964年の秋、文化省主導で開始された[Benoît:193-194]。この「新英雄」たちとは、抗仏戦争中、愛国競争運動が推進されるなかで提唱された英雄像で、1952年5月に開催された第一回全国模範幹部・競争戦士大会でのチュオン・チン(Trương Chinh)の演説「愛国競争主義と新英雄主義」では以下のように定義されている。

- ①祖国に忠誠で、全身全霊で人民に奉仕し、その多くが労働者・農民からなる人民を解放するために積極的に闘争する。
- ②祖国と人民の利益のために、戦闘・生産・工作・学習において勇敢に奮闘し、突撃し、模範となり、つねに運動をリードする。
- ③党の政治路線に沿い、党と政府の政策を正しく執行する。
- ④大衆と密接な関係を持ち、大衆を信じ、大衆に学び、大衆運動の先頭に立ち、大衆に信頼される。
- ⑤傲慢にならず、いつも学習と立功に努める：批判、自己批判という進歩のための鋭利な方法をしっかりと把握する。
- ⑥革命的考え方をもち、枠にとらわれない：アイデアに富み、創造的頭脳を持つ：現代的な科学技術と人民大衆の豊富な経験を結合させる。

「ホー・チ・ミン時代の『英雄』たち」について述べた

今井によれば、「新英雄」とは、共産党と国家に絶対忠誠的な、祖国・人民への奉仕者だと考察している[今井2005:152-154]。

1964年にカオバン省につくられた救国少年隊の隊員である小さな英雄の映画『キム・ドン』(Kim Đồng)と、1951年12月から翌1952年2月にかけて激戦となったホアビンの戦いの英雄クー・チン・ラン(Cù Chính Lan)が主人公の映画『若い戦士』(Người Chiến Sĩ Trẻ)を皮切りに、当時の米国国防長官の暗殺を企てた罪により南ベトナム政府によって公開処刑された『グエン・ヴァン・チョイ』(Nguyễn Văn Trỗi 1966年)など実在の新英雄はもちろん、戦争作家たちによる架空の新英雄を描いた小説を映画化したフィルムまで、英雄を主人公とした戦争プロパガンダ映画は国策で制作されてきた。1986年のドイモイ以降、国策の戦争プロパガンダ映画そのものの衰退に伴い、英雄にまつわるフィルムの制作数は減少するものの、2015年に入っても、のちにベトナムのリーダーとなるホー・チ・ミンのタイ潜伏時代(1927-29)を映画化した『シャムのホー・チ・ミン』(Thâu Chin ở Xiêm 2015年)といった英雄にまつわるフィルムが、政府の多額の資金提供によって細々と制作されている。

一方、近年、ベトナム映画界においても世代交代が進み、現在ベトナム映画を牽引するのは古い国策映画の世代(ハノイ)ではなく、帰還した越僑(在外ベトナム人)を中心にした民間映画会社による大衆娯楽映画の世代(ホーチミン市、旧サイゴン)である。興味深いことに、ベトナム映画の新世代(以降、本稿ではサイゴン新世代と呼ぶ)において、タイトルに英雄を入れ、英雄にまつわるフィルムが制作されている。ただし、サイゴン新世代が制作する英雄にまつわるフィルムはシネマコンプレックスで上映されるヒーローアクション映画である。そこで、本稿では、サイゴン新世代を代表する監督たちがここ10年で監督した英雄をめぐる娯楽映画、特にヒーローアクション映画三本を取り上げ、古い国策映画の世代(ハノイ)に制作された英

雄映画と比較しながら、新世代がどのようなヒーローアクション映画を創作したのか、さらに英雄像を提示したのかを考察する。なお、本稿で取り上げる監督三人のうち、ふたりは1975年ベトナム共和国(南ベトナム)崩壊後、アメリカへ移住した在外ベトナム人(越僑)の2世である。

### チャーリー・グエン監督『英雄の血流』 (Dòng Máu Anh Hùng 2007年)

『英雄の血流』は、その後のサイゴン新世代のアクション映画を推進するスタッフ、キャストによって制作された、ベトナム初の本格的クンフー(功夫)映画で、ベトナム映画におけるヒーローアクション映画の始まりというべき記念碑的フィルムである。本作の監督チャーリー・グエンは1968年、ベトナム共和国の首都サイゴンに生まれた。彼の弟は本作をきっかけにベトナムの人気アクション・スターとなるジョニー・グエン(1974～)、彼の叔父は俳優で、後に民間映画会社チャン・フォン・フィルムの社長となるグエン・チャン・ティン(1952～)である。なお、本作は、1985年からベトナム映画を革新しようと孤軍奮闘し、2007年11月9日に、57歳の若さで亡くなったプロデューサーのチャン・カイ・ホアン(Trần Khải Hoàng)に捧げられている。

グエン監督は1982年に、家族ともにアメリカ合衆国カリフォルニア州に移住する。1992年、アメリカで映画とビデオ制作会社を立ち上げ、ベトナムの原初の王フンヴオン(雄王)の青年時代を映像化した武侠映画『フンヴオン(雄王)18歳の時代』(Thời Hùng Vương 18 1994年)、越僑コメディアンズのヴァン・ソン(Vân Sơn)が主演を演じた喜劇『物換星移』(Vật đổi Sao dời 2001年)の監督・脚本を務めた。これらアクション映画と喜劇が、グエン監督が現在まで制作しつづけているジャンル映画の二本柱となっている。2004年に、叔父で俳優のグエン・チャン・ティンが社長を務める民間映画会社チャン・フォン・フィルムに移籍、そこで監督・脚本家として本作『英雄の血流』に携わることになる。

本作の舞台は1922年の仏領インドシナ。宗主国フランスの圧制によって、各地で反仏運動が起こっていた時代。主人公クオンはベトナム人でありながらも、武術の腕を買われ、フランス植民地政府の手先としてレジスタンス組織を追跡し、破壊するために雇われたエージェントだった。当初、主人公は対敵協力者(コラ

ボレーター)で、民族の裏切り者として登場する。主人公クオンを演じるのはグエン監督の弟ジョニー・グエンである。

クオンとその上司シーらは、レジスタンス組織によるフランス要人の襲撃現場に立ち会うことになるが、優れた武術により襲撃を阻止、襲撃グループのリーダーであるトゥイの武術による反撃をも跳ね返し、彼女を捕縛する。トゥイは勇敢な革命戦士であり、レジスタンスのリーダーの娘だった。シーは拷問により、トゥイに父親の居場所を白状させるようとするも、トゥイの意識は硬く、なかなか口を割らない。一方、クオンは上司のシーが要人の襲撃を裏で画策し実行させたのではないかと気づき、自分のエージェントとしての職務に対しても疑いを抱くようになり、シーや敵対するレジスタンス側への共感を覚え始める。

クオンの父は阮朝時代の官吏で、フランス政府から権力を奪われ、零落し、阿片窟で亡き妻を思いつつ、阿片に溺れている。しかし、息子のクオンには、世界で一番貴重なものは女性の愛で、愛する女性を失うなと諭す。ちなみに、クオンの父は、グエン監督の叔父で俳優のグエン・チャン・ティンが演じている。

トゥイは獄中で、拷問に消耗し、父親の居場所を自白するまえに自殺を試みる。そこに、クオンは現れ、トゥイに彼女の組織にスパイがいることを告げ、脱獄の手助けするための短刀を置く。トゥイは自力で脱獄に成功するも、敵に囲まれ窮地に陥ったときに、再びクオンに助けられる。クオンは自室に彼女を連れていき、匿う。そこに、クオンの不審な動きに疑いを持った、上司シーらが強襲する。刀を跳ね返す鉄布杉功の使い手であるシーに、クオンとトゥイは苦戦するも、クオンの機転で撃退し、逃走する。しかし、無傷のシーは、レジスタンスのリーダーであるトゥイの父を見つけ出すために、クオンとトゥイのふたりを再び追跡するのだった……。

本作は、グエン監督が『フンヴオン(雄王)18歳の時代』に続き、ベトナムの英雄譚にアクションをいかに融合し、娯楽映画に仕上げるかを試みたフィルムである。『フンヴオン(雄王)18歳の時代』は、ベトナム戦争時(抗米救国時代)に、ベトナム民主共和国(北ベトナム)政府主導で、国民の民族意識を鼓舞するために発明された神話の時代である「雄王時代」を舞台に選び、ベトナム戦争の同時代に香港を中心とした中国語圏で活性化した武侠片、つまり、中国が近代にさしかかる前を舞台とした、剣戟を主体としたフィルム[四方

田 2005: 176-185]を融合する試みであった。さらに、本作においては、国策で制作されてきた「新英雄」映画に、ブルース・リー以降のクンフ映画を融合する試みがなされている。グエン監督は、ベトナム民主共和国(北ベトナム)で発展してきた英雄映画のフォーマットに、資本主義国の娯楽産業として発達したアクション映画を融合し、ベトナム初の本格的クンフ映画を創り上げた。

本作が過去のベトナムの英雄映画と比較して画期的だった第一の点は、主人公クオンを演じ、アクション監督も務めたグエン監督の弟ジョニー・グエンの圧倒的な武術で、全身を使って闘うヒーローを映像化した点にある。ベトナムの英雄映画において英雄を演じたベトナムの俳優は、ブルース・リー以降に西側諸国で急速に発展した武芸に関する訓練を受けておらず、クンフを演じることは困難であった。しかし、アメリカでさまざまな武術を学び、アメリカ武術チーム代表にも選ばれた後、スタントマンとして『スパイダーマン2』でトビー・マグワイヤに代わってスパイダーマンを演じたジョニー・グエンであればこそ、クンフを演じることを可能にした。

第二に画期的だった点は、主人公を対敵協力者で民族の裏切り者として設定した点にある。ベトナムの英雄映画において、対敵協力者はサブキャラクターとして登場し、主人公の祖国への忠誠、全身全霊で人民に奉仕する姿勢に最終的に感化され、敵側から味方へ転向する役割が多い。具体例を挙げるなら、『突風』(Nổi Gió 1966年)のフォン中尉や『愛は17度線を越えて』(Vi Tuyên 17 Ngày Và Đêm 1972年)のベエなどがおり、二人とも南ベトナム軍の兵士という設定だった。つまり、ベトナムの英雄映画において、対敵協力者というキャラクターは主人公の信念のゆるぎなさ、イデオロギーの正しさを転向することで証明する役割を担ってきた。もしベトナムの英雄映画の構成をそのまま継承するならば、クオンを対敵協力者からレジスタンス運動への転向させるきっかけをつくるトゥイをむしろ主人公とする構成だったはずである。しかし、本作では、対敵協力者のクオンを主人公に設定し、さらに、対敵協力者でクオンの上司であるシーを敵役に設定することで、トゥイの出会いにより、レジスタンスへ転向した結果、もし転向しなければ、自分もなりえたかもしれない存在である対敵協力者の敵シーと戦い、打ち破ることで、レジスタンスという自分の新しいアイデンティティを確立する話として構成し直している。

加えて、本作で興味深いのは、対敵協力者クオンも、その上司であるシーも、それぞれ越僑出身の俳優であるジョニー・グエンやダスティン・チー・グエンが演じるキャスティングにある。敵役シーを演じたダスティンは、1962年に役者夫婦の息子としてサイゴンに生まれ、1975年、サイゴン陥落後、家族とともに難民としてアメリカに渡った越僑である。つまり、本作において、対敵協力者という役柄とベトナム共和国という俳優の出自が微妙な対応関係にある。

第三に画期的だった点は、『英雄の血流』においてチュオン・チンが提唱した「新英雄」像から多くの部分を継承しつつも、「③党の政治路線に沿い、党と政府の政策を正しく執行する」を回避した点にある。本作の舞台は1922年の仏領インドシナに設定されており、1925年6月、グエン・アイ・クオック(後のホー・チ・ミン)が共産党幹部養成に向けて広州で結成した民族主義的革命組織であるベトナム青年革命同志会は当然、出てこない。ベトナムの英雄映画において、新英雄の定義である「③党の政治路線に沿い、党と政府の政策を正しく執行する」は欠かせない要素であり続けた。なぜなら、1952年、新英雄というコンセプトが提唱されて以降、英雄は共産主義の政治路線を反映する鑑であり続けたからである。しかし、本作においては、共産主義を想起させる言葉や映像は回避され、ナショナリズムに基づく植民地支配に対する抵抗に留めている。本作のナショナリズムに基づく抵抗は、伝統的にナショナリズムと表裏一体の関係にあった功夫片[四方田 2005: 296-317]のヒーローたちの行動原理にむしろ近い。

ベトナム映画における英雄の継承という観点で本作において興味深いのは、息子のクオンを諭す父親を演じているのがグエン監督の叔父グエン・チャン・ティンというキャスティングであろう。グエン・チャン・ティンは、もともとはベトナム共和国時代、娯楽映画の俳優だった。1975年、サイゴン陥落後も、元・共和国の映画人が国外に亡命する中、統一されたベトナム社会主義共和国に留まり、俳優として活躍し続けた。彼が俳優としてベトナムでもっとも有名な役柄は、1982年から1987年まで丸5年間掛け、全8作制作されたベトナム最長の大河シリーズ『ゲームはひっくり返す』(Ván Bài Lật Ngửa)における主人公グエン・タン・ロン(Nguyễn Thành Luân)である。グエン・タン・ロンは、1963年ベトナム共和国での軍事クーデターに関与した諜報員で実在する英雄のファム・ゴック・タ

オ共和国軍大佐(Phạm Ngọc Thảo 1922-1965年)をモデルとした主人公である。つまり、『ゲームはひっくり返す』においてベトナム共和国で俳優だったグエン・チャン・ティンが、同じくベトナム共和国時代に、共和国軍将校という偽りの仮面を被り、北側からの潜入諜報員として南部で暗躍した英雄ファム・ゴック・タオ大佐をモデルとした役柄を丸5年間に渡って演じたことになる。

『英雄の血流』(2007年)と『ゲームはひっくり返す』(1982~1987年)の約20年間では、英雄像をめぐる、先に指摘した「主人公を対敵協力者で民族の裏切り者とする設定」、「党の政治路線、共産主義を回避」の二点の相違が横たわる。まず、『英雄の血流』のヒーロー像においては、プロパガンダ映画の基本となる敵/味方の二項対立軸が緩やかになり、対敵協力者でさえもヒーローに変わりうる可能性の提示が、サブキャラクターのみならず、主人公にまでも適応範囲が広がったと言える。さらに、英雄の条件も緩和され、かつての英雄映画や『ゲームはひっくり返す』において、敵/味方の判別する基準であった共産主義を支持するか否かは『英雄の血流』のヒーローでは問わずに、愛国者として抵抗するか否かという基準に留めている。つまり、『英雄の血流』ではヒーローは出自を問われなくなったうえに、愛国者として抵抗するのであれば、共産主義か否かは不問とされている。

また、本作自体が、かつての対敵協力者として統一後のベトナム社会で蔑まれてきた共和国という出自を持つ俳優、スタッフたちが、「党の政治路線、共産主義を回避」しつつもベトナムへのナショナリズムを示すことで、ベトナムの英雄映画を継承するベトナム発のヒーローアクション映画を制作できることを示した作品であると言える。

### ヴィクター・ヴー監督『英雄の天命』 (Thiên Mệnh Anh Hùng 2012年)

ヴィクター・ヴーもまた越僑監督である。彼は1975年11月、南カリフォルニアに生まれ、育った。彼の両親が1975年4月サイゴン陥落以前、渡米したからである。ロサンゼルススのロヨラ・メリーマウント大学で映画制作の学士号を取得し、1997年、短編フィルム『花火』を初監督、南カリフォルニアで暮らす越僑家族を取り上げた『年初の朝』(Buổi sáng đầu năm 2003年)で長編映画監督デビューを果たす。ちなみに、『年初の

朝』で越僑家族の長男役を演じたのは、『英雄の血流』で主演を演じたジョニー・グエンである。ヴー監督は『冤魂』(Oan hồn 2004年)でホラーを、『愛へのパスポート』(Chuyện Tình Xa Xứ 2009年)でロマンティックコメディを、『運命の交差点』(Giao Lộ Định Mệnh 2010年)でサイコスリラーと、ハリウッドで制作されたさまざまなジャンルの娯楽映画をベトナムに移入することで、ベトナムの娯楽映画のジャンル幅を広げることに貢献した。2011年に監督したコメディ『花嫁大戦』(Cô Dâu Đại Chiến)が、それまでのベトナム映画の興行収入を塗り返る大ヒットとなり、彼はベトナム映画のヒットメーカーのひとりに躍り出る。翌2012年、満を持して監督したのが武侠映画の『英雄の天命』(2012年)である。

『英雄の天命』は、『英雄の血流』がベトナム初の本格的クンフー映画であるならば、そのヒーローアクション映画の流れを引き続いた、本格的武侠映画である。事実、『英雄の血流』で主演とアクション監督も務めたジョニー・グエンがアクション監督として本作にも参加している。

武侠映画『英雄の天命』は作家ブイ・アイン・タン(Bùi Anh Tấn)の長編小説『グエン・チャイ 巻2 血書』(Nguyễn Trãi Quyên 2. Bức Huyết Thư 2010年)を元にしていて、ブイ・アイン・タンは1966年ハノイ生まれの作家で、ベトナムで初めて男性の同性愛をテーマにした小説『女性のいない世界』(Một Thế Giới Không Có Đàn Bà 2004年)を、翌年には女性の同性愛(レズ)をテーマとする小説『レズ——男性のいないプレスレット』(Les - Vòng Tay Không Đàn Ông 2005年)を発表し、『女性のいない世界』は国营テレビでドラマ化され、同性愛をテーマにしたベトナム初のドラマということで話題にもなった。長編小説『グエン・チャイ』はベトナムの民族英雄グエン・チャイとその子孫にまつわる2巻にわたる長編小説である。グエン・チャイ(1380~1442年)は、レ(黎)朝大越国の建国の功臣で、政治家であり、儒学者であり、詩人でもある英雄である。後に初代皇帝となるレ・ロイの軍の参謀格として、抗明(中国王朝)戦に参加し、明を撤退させることに成功。1428年、明から独立、レ(黎)朝大越国の成立に貢献した。レ・ロイ死後、2代皇帝タイ・トンの代の1442年に、タイ・トンがグエン・チャイの別邸に立ち寄った際、急死したため、タイ・トン皇帝暗殺犯の罪を着せられ、1442年に三族ともども処刑された。『グエン・チャイ 巻1 冤屈』(Nguyễn Trãi Quyên 1. Oan

Khuát)は1380年、グエン・チャイが昇龍(タンロン、現ハノイ)で生まれ、1442年、昇龍で冤罪により処刑されるまでの生涯の話となる。続く『グエン・チャイ 巻2 血書』は、グエン・チャイの三族が皆殺しにされたなかで、唯一生き延びた孫のグエン・ユーを主人公とした武侠小説となる。本の背表紙に、「この金庸(Kim Dung)の風格に則した歴史小説の巻は読者にグエン・チャイが退路を絶たれた時から始まり、そして、ベトナム文学にまれな魅力のある武侠の世界を開く」と書かれている。ちなみに、金庸は現代の武侠小説の基本を創った、中国の大作家である。『英雄の天命』のあらすじは以下の通りである。

『英雄の天命』の冒頭、人里離れた山寺にひとりの少年がたどり着く。少年は山寺の師父によって育てられる。月日は流れ、少年はグエン・ユーという名の青年に成長し、師父により武術の修行を受けている。ただし、グエン・ユーはまだ気功をうまく使いこなすことはできない。ある日、王朝の大臣が軍隊を連れて山寺にやってくる。グエン・ユーは昔、その大臣の命により家族が軍人たちに首を刎ねられた時のことを思い出す。師父はグエン・ユーに彼が英雄グエン・チャイの孫で、三族が処刑されたなかで生き残った最後の子孫である事実を告げる。グエン・ユーは三族が処刑されるきっかけとなったタイ・トン皇帝急死事件を探るため、昇龍へ旅立つ。

昇龍の都で、グエン・ユーは若き貴人への暗殺の現場に遭遇するも阻止する。怪我を負ったグエン・ユーは治療のため、貴人の家に招かれる。その貴人は亡くなったタイ・トン皇帝の長兄の息子ヴォン・ギャーで、幼少の時、ともに学んだ記憶から、グエン・ユーがグエン・チャイの孫であることを指摘し、タイ・トン皇帝急死に関する情報をグエン・ユーに教える。事件の謎を探るために、グエン・ユーは宮中に忍び込む。そこで、亡きタイ・トン皇帝の後だった宣慈太后が部下たちにある血書を探す命令を出しているところを立ち聴きする。宮中に暗殺者が侵入し、やがて兵士たちに取り囲まれる。その暗殺者が昼間、市場で出会った少女であることを気付いたグエン・ユーは、戦いに割って入り、少女ホア・スンを救出し、宮中からも脱出する。

ホア・スンには姉がおり、グエン・ユーはその姉からホア・スンが宣慈太后を暗殺を試みた理由を聴く。12年前、彼女たちの姉が突然、「国が減ぶ、血が流れる」という流言を語り出したため、兵士たちに捕まり、河流しにされる。姉妹の両親も暗殺される。姉妹は武芸者

のヴォン・ティンに助けられる。姉妹は一族の悲劇の黒幕を探る中で、その黒幕が宣慈太后であることを突き止め、復讐の機会を狙う。やがて、姉とヴォン・ティンは夫婦となり、夫婦で宣慈太后を暗殺する計画を立てるが、ヴォン・ティンは愛する妻を残し、単独で暗殺を実行する。しかし、暗殺は失敗し、宣慈太后によりヴォン・ティンは返り討ちにされてしまう。愛する夫は失ったホア・スンの姉は、復讐を後悔し、復讐はより悲しみと憎悪を生み出すという考えに至っていた。姉は妹のホア・スンに復讐を諦め、平穏に暮らすように頼むが、ホア・スンは復讐を諦めることができない。

グエン・ユーはヴォン・ギャーを訪れ、宣慈太后が探している血書について尋ねる。その血書は、宦官によって宣慈太后の悪行が書かれたもので、その後、行方不明になっていた。グエン・ユーは血書にタイ・トン皇帝急死事件の真相が書かれていると睨み、血書を探ることを決意する。帰路、グエン・ユーは行軍する隊列を見て、ホア・スン姉妹の家にもどり、姉妹に捜査が迫っているのを、ただちに家から離れることを助言する。しかし、時すでに遅く、宣慈太后配下の將軍とその暗殺団が到着する。応戦する三人だったが、多勢に無勢、姉が敵の足止めに残り、グエン・ユーはホア・スンを連れて、逃げることに。井戸に身を隠し、敵をやり過ごした後、家に戻ったふたりは、姉の遺体を発見する。

ふたりは山奥に身を隠す。グエン・ユーは、姉の復讐を果たすため昇龍へ向かうとするホア・スンに、自身がグエン・チャイの孫であることを明かし、留まるように説得する。ある日、川上から死体が出てくる。不審に思ったふたりは川上の村へ足を運ぶ。そこには、村人と將軍配下の暗殺団の死体が散乱していた。息がある村人を見つけるも、「血書」と言い残し息絶える。ふたりは將軍が血書を手に入れ、部下も殺したと予想し、將軍を追跡する。森の小屋で休息している將軍を見つけたふたりは、小屋に忍び込み、血書を盗み出そうとするも、大臣が部下を伴い現れ、將軍から血書を奪い取る。グエン・ユーとホア・スンは大臣一行の後を追う。グエン・ユーは背中に傷を負うも、血書を手に入る。ホア・スンは負傷したグエン・ユーを連れ、將軍の追跡を振り払い、無事、避難する。グエン・ユーはホア・スンの献身的な看病により、回復する。さらに、療養の過程で、使いこなせなかった気功を体得する。

ある晩、グエン・ユーは宮中に乗り込み、宣慈太后に復讐を果たす夢を語る。復讐を果たした後、祖父であるグエン・チャイが現れる。血書によって、グエン・チャ

イとその三族の無実が証明できると主張するグエン・ユーに向かって、グエン・チャイは血書が人の血を流させ、血をもたらすと言ひ残し、姿を消す。そして、グエン・チャイの目の前には、戦火のなか、兵士たちが殺し合い、屍に変わりゆく光景が広がる。悪夢から覚めたグエン・ユーは、血書をさらなる災いをもたらすという認識に至り、復讐を果たすべきか、否かで迷う。彼はホア・スンに悪夢と悩みを打ち明ける。しかし、彼女は彼に、宣慈太后は自分の罪を償い、死ぬべき存在で、「目に目を、血に血を」と反論する。

ふたりは、ヴォン・ギャーに血書を届ける。ヴォン・ギャーは血書をもとに、宣慈太后に対して反乱を起こす計画をグエン・ユーに打ち明ける。搜索の旅を終え、ヴォン・ギャー宅で休息するグエン・ユーとホア・スンだったが、グエン・ユーはヴォン・ギャーと宣慈太后配下の将軍が密談している様子を目撃する。ヴォン・ギャーは将軍に援助を求め、宣慈太后の一派を根絶やした後、自ら皇帝になると宣言する。グエン・ユーは血書をめぐる争いの本当の黒幕はヴォン・ギャーであることをようやく理解する。グエン・ユーはヴォン・ギャーから血書を奪い返すために、ヴォン・ギャー側について将軍と対決する。将軍の容赦ない攻撃に、劣勢に立たせるグエン・ユー。そこに、ホア・スンが忍び込み、ヴォン・ギャーを人質にとり、将軍に攻撃をやめるように脅す。ホア・スンも人々の血が流れるのを避けるために自分の復讐を諦めることをグエン・ユーに伝える。しかし、ホア・スンはヴォン・ギャーの隠した持った短刀で刺され、倒れ込む。深手を負ったホア・スンを救うため、グエン・ユーは将軍に再度戦いを挑み、氣功の技によって、将軍とヴォン・ギャーを倒す。

宮中では、宣慈太后も自分が斬首処刑に追いやった者たちが亡霊として現れ、償いを求め、責められる悪夢を観る。そして、グエン・ユーが宮中に血書を手に現れる。彼は護衛の兵士たちに取り囲まれながら、血書を宣慈太后に渡す。そして、彼は宣慈太后に向かって、血書がほかの誰かの手に渡れば争いがまた起こるので、血で血を洗う争いの連鎖を断ち切ることを願い、血書を宣慈太后に渡すのだと言ひ残し、その場を去ろうとする。しかし、宣慈太后は兵士たちに命じ、彼の行く手を阻み、何者か？と問いたす。彼は、12年前、あなたによって処刑されたグエン・チャイの家族の最後の生き残りだと返答する。宣慈太后はしばらく考えたのち、彼を帰ることを許す。グエン・ユーはホア・スンと、遺恨のない別の世界で生きることを選び、育った

山寺で待つホア・スンと再会した後、二人で船に乗り、新天地に向かって旅立つところで、フィルムは終わる。

『英雄の天命』が過去のベトナムの英雄映画と比較して画期的だった第一の点は、冤罪による、グエン・チャイと三族の処刑という事件から始まり、英雄の死後の世界を舞台にした点にある。過去のベトナムの英雄映画は、英雄の死を烈士として美化してきたため、英雄の悲惨な死、残された遺族の苦しみに焦点を当てた映画は皆無に等しかった<sup>1)</sup>。たとえば、グエン・チャイの生涯を取り上げたドキュメンタリーに、ベトナムを代表するダン・ニャット・ミン監督による『グエン・チャイ』(1980年)がある。本作とドキュメンタリー『グエン・チャイ』を比較すると、『英雄の天命』はグエン・チャイと三族の処刑が強調された構成になっていることがわかる。

ミン監督の自伝によれば、ドキュメンタリー『グエン・チャイ』は、グエン・チャイ生誕600年の機会に、ミン監督が当時所属していた劇映画スタジオの上層部から制作を依頼され、監督したドキュメンタリーである。当時、グエン・チャイに関する記録は、ベトナム歴史博物館に掛けられている、絹絵に描かれた肖像のほか、何もそろっていなかった。そんな悪条件のなかで、ミン監督は『グエン・チャイ』を完成させる[Đặng 2005: 77-81]。ミン監督の『グエン・チャイ』では、グエン・チャイの生誕から殺されるまでの生涯と、その後の世代との関係が触れられている。ただし、グエン・チャイの三族処刑に関しては、以下のようにあいまいにぼかされて、表現されている。

まず、波が打ち寄せる岩場の風景が映される。再び、グエン・チャイの肖像が映り、真っ赤なフィルターが掛けられた、波が打ち寄せる岩場の風景が映る。これら一連の岩場の映像のつながりのなかで、ボイスオーバーで、グエン・チャイは、民を深く愛する(Thương)心魂を持つがゆえに、1442年、痛ましい事件(Thán Án)に至り、亡くなったと音声で説明される。三族処刑に関して言及されるシーンはこれのみである。

その後のシーンでは、民族英雄グエン・チャイと、ベトナム社会主義共和国の偉人たちは、国を守った英雄であるという共通点が強調される。まず、ボイスオーバーで、グエン・チャイが後世のために残した道は国を守る道であり、ホーおじさん(ホー・チ・ミン)が私たちに丁寧を教えていると音声説明され、次に、ホー・

1) 例外として、ダン・ニャット・ミン監督『きのう、平和の夢を見た』(Đừng Đốt 2009年)を挙げることができる。

チ・ミンが兵士たちの前に話し掛けている写真、ホー・チ・ミンが1965年2月15日に、グエン・チャイが晩年に隠居し、その後、奉られているコン・ソン(Côn Sơn)寺で碑文を読んでいる写真が挿入される。続いて、同じコン・ソン寺の碑文を読んでいる、ベトナム人民軍の指導者であるヴォー・グエン・ザップ将軍たちの一団の映像を流れる。そのうえで、歴史は過去に属しておらず、歴史はとどまることなく、現在と未来の間を生き続けているとボイスオーバーで説明される。コン・ソンの石に花を捧げる少年少女たちが映されて、グエン・チャイに関する文献からの引用が文字で映される。文献は、レー・タイン・トン(Lê Thánh Tôn)<sup>2)</sup>、レ朝が所蔵する勅封1767年(Sắc Phong Của Nhà Lê Năm 1767)、ファン・フー・ティエン(Phan Phù Tiên)<sup>3)</sup>、ファム・ヴァン・ドン(Phạm Văn Đồng)<sup>4)</sup>などである。特に、ファム・ヴァン・ドンは、彼が書いた『グエン・チャイ 民族の英雄人』(1962年)の最後近くからの引用である[Hoàng 1997: 62]。最後に、コン・ソンの石への献花が映し出されて、「年月が過ぎ去っても、コン・ソンの石はいまだにもとのままである。時間は賢人の席に花を捧げる」というボイスオーバーで締め括られる。

ダン・ニャット・ミン監督『グエン・チャイ』において、グエン・チャイが外敵ではなく、朝廷により三族ともども処刑されたという史実への言及がほぼなされず、グエン・チャイは国を守った民族英雄の栄光が強調された構成となっている。つまり、1980年に制作された『グエン・チャイ』は、1979年、中華人民共和国とベトナム社会主義共和国の間で行われた、中越戦争時に制作された、対中プロパガンダ芸術の影響が根強く残り、侵攻してきた外敵である明と中国、それを追い払った英雄グエン・チャイとベトナム社会主義共和国の偉人たちという、プロパガンダ映画の常套の手法である、敵／味方の二項対立が強調され、戦後、朝廷をめぐる内紛が英雄の死につながった点がほかされている<sup>5)</sup>。

一方、『英雄の天命』においては、ミン監督『グエン・チャイ』とは逆に、侵攻してきた明は一切登場せず、むしろ、建国後の朝廷をめぐる権力闘争がグエン・チャイと三族の処刑につながった、英雄の死をめぐる陰の

部分に焦点が当てられている。また、『英雄の天命』では処刑を斬首という映像できちんと観客に提示する。直接、首が落ちるシーンは映されないまでも、首を受ける血みどろの桶、血糊を付いた首切り刀などを映すことで、斬首処刑の残酷さを間接的に表現する。さらに、家族が斬首される瞬間を目撃することで成人してもなお悪夢に苦しむグエン・ユー、罪なき人々を斬首処刑に追いやったことで亡霊に責められる悪夢にうなされる宣慈太后、被害の遺族と加害者がともに、グエン・チャイと三族の処刑により、後々までに苦しむ様子、言い換えれば、PTSD(Post Traumatic Stress Disorder 心的外傷後ストレス障害)を引き起こす様子も映像化される。つまり、『英雄の天命』は、民族英雄グエン・チャイとその一族の悲劇としての死を映像化することで、ベトナムの英雄映画が美化してきた、英雄の死、烈士の存在に一石を投じ、英雄映画が映像化してきた「英雄の栄光」に隠された陰の部分に観客に提示しようとしている。

第二に画期的だった点は、親を殺された子供たちが復讐の連鎖をいかに断ち切るか、いかに親の敵を許すかという、南北統一以後のベトナム社会に横たわる、遺恨と許しのテーマに向きあった点にある。本作の主人公のグエン・ユーとホア・スンが親の敵である宣慈太后への復讐を行わず、最終的に許す。本作において、血が血を呼ぶ復讐ではなく、血を流さない復讐の放棄、許しにこそ、英雄として行為があるという見解が最終的に観客に提示される。本作は、敵を倒すこと、烈士になることが最重要目的だった過去のベトナムの英雄映画と比較して、新たな英雄像を提出している。その英雄像とは、北のベトナム民主主義共和国と南のベトナム共和国、かつての敵同士が共生するベトナム社会主義共和国における、親たちが戦い合った子供の世代(戦後)に向けた、寛容さを持つ英雄像とも言える。もっとも、グエン・ユーとホア・スンが、遺恨のない別の世界で生きることを選び、二人で船に乗り、新天地に向かって旅立つ、本作のラストは原作のラストと異なる分、統一後のベトナムに背を向け、新天地である海外へ旅立っていった、越僑の人々を彷彿とさせる。

### グエン・クアン・ズン監督『超人X.』 (Siêu Nhân X. 2015年)

グエン・クアン・ズン監督は1978年生まれ、父親は81年度モスクワ国際映画祭金賞受賞作、ホン・セン監

2) 1442~97年 レ朝5代皇帝(在位1460~97年)。

3) グエン・チャイの同時代を生きた歴史学者。

4) 1906-2000年。ベトナム共産党最高指導者の一人で、1955年から1976年までベトナム民主共和国(北ベトナム)、1976年から1987年までベトナム社会主義共和国の首相を務めた。

5) ミン監督は1982年に、中越戦争を舞台とした、プロパガンダ映画の枠から抜け出した戦争映画『射程内の街』(Thị xã trong tầm tay)を創る。

督『無人の野』の脚本を担当した、革命文学作家グエン・クアン・サン(Nguyễn Quang Sáng)で、いわゆる二世監督である。2000年、ホー・チ・ミン市映画・演劇大学演出部卒業後、プロデューサーとしてベトナムの民間映画会社BHDに勤め、2006年、監督に転進し、ベトナムの民話を現代に舞台を移したコメディ『チュオン・バの魂、肉屋の体へ』(Hồn Trương Ba, Da Hàng Thịt)で長編デビューする。ちなみに、『チュオン・バの魂、肉屋の体へ』の主役も、ジョニー・グエンである。つまり、俳優ジョニー・グエンは、ズン監督のロマンティックコメディ『死神のキス』(Nụ Hôn Thần Chết 2008年)でも主役(死神役)を務めており、兄のチャーリー・グエンのみならず、ズン監督、ヴィクター・ヴー監督の初期作の主役を務めることで、サイゴン新世代のフィルムを代表する男優になった。父親のグエン・クアン・サンが脚本家としてホン・セン監督と組み、『北東風の季節』(Mùa Gió Chướng 1978年)、『洪水の季節』(Mùa Nước Nổi 1986年)[石坂 1990: 162-167]や、他の監督との『彫像』(Pho tượng 1982年)、『いつまで』(Cho đến bao giờ 1984年)など、1976年以降、ホー・チ・ミン市劇映画スタジオ(国营)制作を中心とする旧世代の戦争映画で活躍したのに比べ、息子のズン監督は、民間映画会社による娯楽映画のヒットメーカーとして活躍してきた。人気歌手のミン・ハン(Minh Hằng)と女優ティン・ハン(Thanh Hằng)をダブル主演にした、ベトナム初の商業ミュージカル映画『プリリアントなキスたち』(Những Nụ Hôn Rực Rỡ 2010年)、ティン・ハンとタン・タン・ハ(Tăng Thanh Hà)をダブル主演に、女性暗殺団を舞台にした武侠映画『美人計』(Mỹ Nhân Kế 2013年)をヒットさせた。現在、ズン監督の活躍は映画監督業に留まらず、音楽ショーのプロデューサーやゲームショーのディレクター、作曲家、コラムリストなどに及び、サイゴン新世代を代表する、マルチクリエイターのひとりである。

2015年、前作から2年ぶりにズンが監督した『超人X』は、スーパーヒーローアクションコメディである。あらすじは以下の通りである。新作のジュエリーの発表会場において、強盗一味に同社のトップである億万長者のキキ嬢が誘拐される。キキ嬢を演じるのは、前作、前々作で主役を演じたティン・ハンで、彼女はズン監督の常連女優で、本作が『死神のキス』以来、主演4作目である。その強盗一味を退治し、キキ嬢を救出したのは、黒尽くめのマスクとボディスーツに身を包んだ超人であった。その超人の正体はスン青年で、変

態マッドサイエンティストの実験台となり、ゴキブリの能力を身につけ、ゴキブリ超人になってしまったのだった。スンの夢は、自分のブティックの店を開くことと、憧れの男性歌手を親しくなることだが、ギャングブル狂いの母親が借金まみれで、その借金を返済するため、マネージャーのフィーと組んで、金稼ぎの副業として、悪を退治する正義の味方をしぶしぶこなしていた。しかし、キキ嬢を助けたことがきっかけで、彼女に惚れられてしまい、マネージャーの命令で、正義の味方として嫌々ながらも彼女と付き合う羽目になる。なぜなら、スンはゲイであり、自分自身がゲイであることを母にカミングアウトできず、秘密にしていた。

一方、先の強盗一味で、ただひとりだけ現場から逃走できた、女性メンバーのティエンは、逮捕された仲間を監獄から救出し、超人への復讐の機会をうかがっていた。そこに、手助けを申し出たのは、かつてスンをゴキブリ超人に変えた、マッドサイエンティストだった。彼はティエンに、短時間ながら超人に変わる薬を投与する。超人に変わったティエンは、監獄から強盗一味を救出、再び強盗一味は野に放たれる。超人スンのつれない態度に業を煮やしたキキ嬢は廃墟での狂言誘拐を画策する。しかし、その狂言誘拐は超人に変わる薬を投与した強盗一味に悪用され、超人スンは任務に失敗、キキ嬢を救えず、怪我を負わせてしまう。

復讐に燃える強盗一味は、キキ嬢を再度誘拐し、スンの母親、マネージャーのカップルまでも人質に取ったうえに、倉庫を改造し、超人を倒すための罠を張る。スンの弱点であるゴキブリによる罠に苦戦するも、敵を撃退し、母親、マネージャーのカップルを救出する。スンはボディスーツに入り込んだゴキブリを取り出すため、マスクとボディスーツを脱いだ事をきっかけに、母親に自分がゲイであることをカミングアウトする。母親は、ゲイであるかどうかは関係なしに、息子は息子であるとスンを受け入れる。

残りの強盗一味は、キキ嬢の指を一本、切り離し、銀行の貸金庫(指紋認証システム)に納められている資産を強奪に向かう。スンと仲間たちはキキ嬢の誘拐先を突き止め、キキ嬢を救出、マッドサイエンティストを捕らえる。スンは強盗一味を追って、銀行の貸金庫へひとり赴き、最後の対決を行う。しかし、多勢に無勢で、スンは追い詰められる。そこに、助っ人が現れる。スンの母親である。寝返ったマッドサイエンティストにより、超人に変わる薬を投与され、彼女は超人ママに変わっていた。超人ママの登場により、形勢は逆転、



さらに超人となったキキ嬢も参戦し、強盗一味を退治し、一網打尽にする。すべての片が付いたちょうどの頃に、超人となったマネージャーの彼女までも助勢に遅れてやって来る。強盗一味の一件は無事解決するも、超人は忙しい。サイゴンの平和を守るため、スンは正義の味方として、今日も街を飛び回るのだった。

『超人X.』が過去のベトナムの英雄映画と比較して画期的だった第一の点は、ベトナム初のスーパーヒーロー(英雄)映画という点である。スーパーヒーローというキャラクターは、1938年にスーパーマンが登場して以来、主にアメリカン・コミックで発達した。つまり、スーパーヒーローはアメリカ文化を代表するシンボルのひとつである。たとえば、2008年にハリウッドで映画化された「アイアンマン(Iron Man)」というマーベルのキャラクターがいる。もともと、アイアンマンは、1963年、漫画原作者のスタン・リーがマーヴェル・コミックスのために創作した、共産主義者と戦うスーパーヒーローだった。兵器開発の技術者にして経営者でもある主人公は、当時アメリカが軍事支援していたベトナム共和国へ軍兵器の技術顧問として赴くが、ベトナム民主共和国軍に捕らわれ、アメリカを倒す新兵器を開発するように強要される。彼は強化装甲服を作り、それを着用して共産主義者と戦うスーパーヒーロー、アイアンマンとなる[森田2013: 290]。すなわち、社会主義国家であるベトナム民主共和国側に見れば、共産主義者と戦うスーパーヒーローが活躍する当時のアメリカン・コミックは、敵国のプロパガンダ芸術として認定されていた。さらに、1975年4月30日サイゴン陥落以降、新しい社会主義国政府により、翌5月から南部地域からアメリカ文化の排除が始まり、「二十三日午前八時以降、「アメリカ文化に毒された」本や、レコードの販売を厳しく罰する、との通告が出て、歩道をにぎわした本屋もアツという間に消えてしまった」[牧 2009: 169-170]、アメリカン・コミックも「アメリカ文化に毒された」本なので、表立って、売買できなくなり、これ以降、社会主義国ベトナムにおけるスーパーヒーロー文化は衰退した。

社会主義国ベトナムにおいて、スーパーヒーローの映画を制作することは、ベトナム統一後、国内から排除した、アメリカ新植民地主義や傀儡政権(ベトナム共和国を指す)の退廃・低俗な文化・芸術を復活させることを意味する。したがって、過去のベトナムの英雄映画は、1964年の秋、文化省主導で開始された、共産主義プロパガンダの流れに属するのに対して、スーパー

ヒーローを主人公にした本作は、むしろ、アメリカン・コミック、ハリウッド映画といった、かつての退廃・低俗な文化・芸術をサイゴンの新世代がリスペクトし、オマージュを捧げた娯楽作品に仕上がっている<sup>6)</sup>。

第二に画期的だった点は、主人公のスーパーヒーローがゲイであるという設定にした点にある。これまでのベトナム映画において、英雄もヒーローもゲイであるという設定のフィルムは撮られたことがなかった。そもそも、ベトナム映画において、男性同性愛者が登場するようになってから歴史は浅く、サイゴンのゲイの若者たちの青春を映像化した、ヴー・ゴック・ダーン監督(Vũ Ngọc Đăng)の『反乱するホットボーイ』(Hot boy nổi loạn 2011年)から始めて、男性同性愛者が脇役ではなく、主要な登場人物として映像化されるようになった。2014年末に公開された、チャーリー・グエン監督による、ゲイの不動産王ホイねえさんを主人公にしたコメディ『ホイにオマカセ』(Đề Mai tính 2)は記録的な大ヒットをした。しかし、『ホイにオマカセ』は、ベトナムの国内のいくつかのLGBT団体から主人公ホイは男性同性愛者に対する攻撃的なカリカチュアではないかという批判を受け、論争に発展した。『超人X.』は、2011年以降、ベトナム映画で始まった男性同性愛者に関する映画のムーブメントのひとつとして位置づけることができる。

本作でゲイを主人公にした理由として、ズン監督は福岡での上映会場における質疑応答で、以下のように答えている。

いま同性愛者に対してはベトナムでは二通りの考え方があります。同性愛を支援する考え方と、割と前の世代で同性愛を応援できない考え方です。私の友人のなかでも、お父さん、お母さんに同性愛者であることがわかったときに、顔を見てもらえなかったり、あるいは親子の縁を切られたりした人などもいました。いまのベトナム社会は同性愛者に対する接し方はほかのいくつかの地域よりはよくなっていると思います。私自身も同性愛者の友だちがいます。友だちはとても能力があり、優秀で、芸術の分野においては成功を収めています。まわりにも認められている友だちなのですが、そのなかにはまだ家族に受け入れてもらえない人もいます。私の考

6)「タランティーノ監督が憧れというズン監督は『彼の映画のほうが出来がいいですけどね』と笑います」[アジアフォーカス・福岡国際映画祭実行委員会 2015b]。

え方としては、同性愛者であっても、自分が持っている能力を十分に評価され、尊重されるべきだと思います。

本作における、ズン監督の同性愛者に対する考え方は、ベトナムでの二通りの考え方のうち、前者の同性愛を支援する考え方である。さらに、ズン監督は、希望を込めて、前の世代に属するスンの母親がゲイであることを告白した息子を承認するだけに留まらず、その後、息子の危機に際して、超人になり、助けに駆けつける、献身的な姿を映像化している。

第三に画期的だった点は、本作が英雄をめぐるコメディ映画である点だ。過去のベトナムの英雄映画においては、プロバガンダとして英雄をより神話化する目的で、映画というメディアが使用された経緯を持つため、そもそも、英雄を茶化(脱神話化)して、笑いを取る発想がなかった。一方、本作において、ズン監督は英雄を超英雄(スーパーヒーロー)という非現実な設定を導入し、検閲や批判に対する逃げ道を確保することで、英雄を茶化(脱神話化)して、愛嬌のある主人公を中心に据えたコメディに仕上げた。スンはスーパーヒーローでありながらも、ゲイでゴキブリが苦手という「新英雄」における人民の模範、理想的人物像からは遠い存在である。

ズン監督は監督メッセージとして以下のように述べている。

スーパーヒーローは、普通の人々と大きく違うわけではないではありません。そのスーパーパワーを取り去ってしまえば、彼らもやはり人間ならではの現実に直面しなければなりません。彼らとて完璧ではないのです[アジアフォーカス・福岡国際映画祭実行委員会 2015a: 54]。

ズン監督は、スーパーヒーローを完璧な存在、理想的人物としてではなく、等身大の悩みを抱えた若者として映像化することで、英雄として神話化はすることを避ける。本作は、ヒーローらしくないスンが彼なりにさまざま壁にぶち当たり、失敗し、ズッコケる様子をコメディとして提示すると同時に、彼が人としてもヒーローとしても成長する過程も見せる、青春映画としての側面を持つ。

本作がスーパーヒーロー映画のコメディとして秀逸なのは、マッドサイエンティストが発明した「超人

に変わる薬」によって、主人公以外の登場人物も超人に変身できる設定を導入した点にある。超人の数は映画が進めば進むほど増え、スンの超人として力は相対的に下がる設定にしている。

特に、コメディとしての山場は、終盤、それまで超人スンに救われる存在だった、母親、キキ嬢、マネージャーの彼女まで、超人に変身して、スンの窮地に次から次へと助っ人として現れる展開である。1作品にひとりの英雄という英雄映画の暗黙の了解、スーパーヒーローは急に増えたりしないというスーパーヒーロー映画の前提を逆手に取った、コメディとしてのスーパーヒーロー映画の新たなオチを提示している。

また、「超人に変わる薬」の導入は、超人の力を強盗一味のように悪事に使うか、母親、キキ嬢、マネージャーの彼女たちのように悪事を退治するために使うかは、結局のところ、超人の力を使うその人の心がけ次第である点も明確にしている。本作では、性別や出自に関係なく、人は誰でもヒーローとなり、社会貢献できるのだと、過去のどのベトナム英雄映画よりも、英雄をもっとも開かれた存在として扱っている。

## おわりに

以上、サイゴン新世代を代表する監督3人による、英雄をめぐる娯楽映画、特に、ヒーローアクション映画3本、チャーリー・グエン監督『英雄の血流』(2007年)、ヴィクター・ザー監督『英雄の天命』(2012年)、グエン・クアン・ズン監督『超人X.』(2015年)を取り上げ、古い国策映画の世代(ハノイ)に制作された英雄映画と比較しながら、新世代がどのようなヒーローアクション映画を創作したのか、さらに英雄像を提示したのか、検討してきた。

3人の監督の第一の共通点は、ヒーローアクション映画を創作するにあたり、1975年以降、ベトナム映画界の社会主義化によって制作されなくなった娯楽映画ジャンルをベトナムに導入した点にある。『英雄の血流』においてはブルース・リー以降のクンフ映画を、『英雄の天命』においては武俠映画を、『超人X.』においてはアメリカ発のスーパーヒーロー映画を導入した。『英雄の血流』、『英雄の天命』の2本に関しては、アクション監督として参加した越僑俳優のジョニー・グエンの存在が大きい。ジョニー・グエンがアメリカで学んだ武術とスタントの技術がなければ、サイゴン新世代におけるアクション映画がいまのかたちをな

していないであろう。彼は武道家として、ブルース・リーの截拳道(ジークンドー)のように、ホー・チ・ミン市のニャーベ県(Huyện Nhà Bè)にリン・フォン・トレーニングセンターを2012年に開設し、後続の指導に当たっている<sup>7)</sup>。香港映画においてアクション映画がブルース・リー以前以後と分けられるように、ベトナム映画においてアクション映画はジョニー・グエン以前以後と分けることができる。

3人の監督の第二の共通点は、英雄像に、監督たちがそれぞれ自分のたちの出自や環境を踏まえたベトナムのローカルな社会の陰の部分盛り込むことで、「新英雄」を少しずつ脱神話化した傾向も持つ点である。『英雄の血流』においては対敵協力者、『英雄の天命』においては冤罪によって親族を処刑された子孫、『超人X.』においてはゲイという要素である。対敵協力者、冤罪によって親族を虐殺された子孫という設定には、越僑出身者が社会主義国ベトナムにおいて公では口にするのは憚られるベトナム共和国にまつわる暗い過去を彷彿とさせる。また、ゲイという設定も、2011年以降、ベトナム映画で本格的に取り上げられるようになり、2015年には、家族・婚姻法の改定により、同性婚を禁止する規定が撤廃され、同性愛者に対する偏見も改善されつつあるものの、まだまだ古い世代では容認する人は多いとは言えない。

一方、3人の監督の間に相違点もある。それぞれの映画における英雄像へのチュオン・チンが提唱した「新英雄」の影響の違いである。『英雄の血流』においてチュオン・チン「新英雄」像から多くの部分を踏襲しつつも、「③党の政治路線に沿い、党と政府の政策を正しく執行する」が回避されるに留めていた。『英雄の天命』は14世紀の武俠映画であるのも手伝い、「新英雄」の影響はかなり薄れている。むしろ、民族英雄グエン・チャイとその三族の悲劇としての死を映像化することで、ベトナムの英雄映画が美化してきた、英雄の死、烈士の存在に一石を投じ、「英雄の栄光」に隠された陰の部分の提示した。さらに英雄映画が問わなかった、親を殺された子供たちが復讐の連鎖をいかに断ち切るか、いかに親の敵を許すかという、南北統一以後のベトナム社会に横たわる、遺恨と許しのテーマに向きあった。『超人X.』に至っては、ズン監督の父親が旧世代の戦争映画で活躍した脚本家であるにもかかわらず、「新英雄」の影響はほぼない。むしろ、越僑監督の

ふたり以上に、スーパーヒーローを育んだアメリカン・コミック、ハリウッド映画といった、かつての退廃・低俗な文化・芸術をリスペクトし、オマージュを捧げている。そのうえで、スーパーヒーローを等身大の若者として映像化することで、英雄を茶化(脱神話化)した。したがって、サイゴン新世代がつくる英雄像に関して、『英雄の血流』(2007年)の英雄像は、「新英雄」とブルース・リー以降のクンフー映画のヒーロー像との混成でありながら、新英雄の影響のほうが強かったが、『超人X.』(2015年)の英雄像に到っては、「新英雄」の影響はほぼなくなり、ハリウッド発のスーパーヒーロー映画のヒーロー像の影響のほうが強くなり、英雄と呼ぶより、ヒーローと呼んだほうが適切であるように変わってきている。つまり、サイゴン新世代の監督たちが映画界で活躍し始めた2000年代半ばから、時代が経つにつれ、「新英雄」の影響は薄れ、むしろ3人の監督がベトナム映画に新たに導入した、海外の娯楽映画ジャンルのヒーロー像のほうが影響を増していることがわかる。すなわち、サイゴン新世代の英雄像は、三人三様で、ベトナムにおける陰の部分を取り込むことで「新英雄」を少しずつ脱神話化すると同時に、娯楽映画ジャンルを取り込むことで、共産党と国家に絶対忠誠的な、祖国・人民への奉仕者としての「新英雄」からむしろ、欧米仕込みのヒーローへ移行しつつある。

ちなみに、今回、取り上げた、サイゴン新世代を代表する監督3人によるヒーローアクション映画3本ともに、「新英雄」の「③党の政治路線に沿い、党と政府の政策を正しく執行する」が回避されていた。さらに、サイゴン新世代を代表する監督3人は作中で一度も、実在する「新英雄」のみならず、ベトナム人民軍、共産党員も映したことがない。さらに、20世紀の戦争と革命の映画を制作したこともない。戦争と革命映画が中心だったベトナム映画史において、サイゴン新世代を代表する監督3人のフィルムは、非常にまれなフィルムである。当然、サイゴン新世代を代表する監督3人は、一度も、人民軍、共産党員とヒーローアクション映画を融合するフィルムは制作していない。

一方、人民軍の英雄とヒーローアクション映画の融合に関して、最近、中国映画において興味深い動きがあったので、最後に、サイゴンの古い世代の監督による、最新の中国英雄映画を紹介して、本稿を終える。その映画とは、ツイ・ハーク『タイガー・マウンテン——雪原の死闘』(智取威虎山 2014年)である。本作は中国・香港合作により、実話に基づいた中国の有名小説

7) Lien Phong Training Center ウェブサイト <http://lienphong.vn/>参照(最終アクセス日: 2015年11月17日)。

『林海雪原』を映画化したフィルムで、匪賊たちが中国東北地方を占領し、民衆を脅かしていた1946年の国共内戦時代が舞台である。強力な大砲で武装された難攻不落の要塞・威虎山(タイガー・マウンテン)を、人民解放軍(共産党の軍隊)の203部隊がいかに攻略するかという内容である。ツイ・ハークは、1951年、広州に近い海豊県に生まれ、生後まもなくサイゴンに移り住んだ、ベトナム華僑である。1966年に香港の高校に通い、アメリカに留学、映画制作を学ぶ。香港にて1979年『蝶変』で映画監督デビュー。『蜀山奇傳／天空の剣』、『男たちの挽歌』、『チャイニーズ・ゴースト・ストーリー』、『スウォーズマン』などの人気シリーズを次々プロデュースして「香港のスピルバーク」と称される、香港娯楽映画の巨匠である。

小説『林海雪原』は1960年に最初に映画化され、続いて文革中には样板戯(革命模範劇)として舞台化され、さらに1970年にはその样板戯を映画化したのが『智取威虎山』である。つまり、本作は、人民解放軍の英雄を映像化したプロパガンダ映画『智取威虎山』を、ツイ・ハークがヒーローアクション映画としてリメイクした作品となる。本作では、冒頭の送別会でのカラオケシーンとエンドロールで二度も『智取威虎山』(1970年)のシーンが引用されている。つまり、最新の中国映画においては、ベトナム華僑で香港の監督が中国人民解放軍の英雄を映像化したプロパガンダ映画をヒーローアクション映画としてリメイクした作品が登場し、実際、中国で大ヒットしている。

サイゴンの新世代が今後、『タイガー・マウンテン——雪原の死闘』の大ヒットを受けて、人民軍の英雄を題材として取り上げたり、過去の英雄映画、たとえば、グエン監督の叔父が主演した『ゲームはひっくり返す』シリーズ(1982~1987年)を、ヒーローアクション映画としてリメイクしたりするのか、サイゴン新世代による、「新英雄」とヒーローアクション映画を融合するフィルムは誕生するのか、ベトナムにおけるヒーローアクション映画の今後の展開に注目している。

## 参考文献

- アジアフォーカス・福岡国際映画祭実行委員会 2015a  
『第25回 アジアフォーカス・福岡国際映画祭  
カタログ』。
- アジアフォーカス・福岡国際映画祭実行委員会 2015b  
「ディレクター懇談 ③『超人X.』監督・脚本：

グエン・クアン・ズン」アジアフォーカス・福岡  
国際映画祭ウェブサイト、9月21日、[http://  
www.focus-on-asia.com/films/907/](http://www.focus-on-asia.com/films/907/)(最終ア  
クセス日:2015年11月17日)

- 今井昭夫 2005 「ホー・チ・ミン時代の「英雄」たち  
——ベトナムにおける「英雄宣揚」と人民動  
員」『東京外国語大学論集(Area and Culture  
Studies)』no.70、pp.151-171。
- 石坂健治 1990 「「勝った国」の映画——『水の季節』  
を観る」『ユリイカ 詩と批評』(1990年8月  
号 特集 ベトナム戦争とアメリカ 描きだ  
されたVietnam War) pp.162-167。
- 牧久 2009 『サイゴンの火焰樹 もうひとつのベト  
ナム戦争』ウェッジ。
- 森田匡 2013 「スーパーヒーローとアメリカ社会」『政  
治学研究』第49号、慶應義塾大学出版会、pp.  
277-300。
- 四方田犬彦 1993 『電影風雲』白水社。
- 四方田犬彦 2005 『ブルース・リー 李小龍の栄光と  
孤独』晶文社。
- Benoît de Tréglodé (2012) *Heroes and Revolution in  
Vietnam*. NUS Press
- Bùi Anh Tấn (2010) *Nguyễn Trãi Quyển 1. Oan  
Khuất*. Nhà Xuất Bản Thanh Niên
- Bùi Anh Tấn (2010) *Nguyễn Trãi Quyển 2. Bức  
Huyết Thư*. Nhà Xuất Bản Thanh Niên
- Đặng Nhật Minh (2005) *Hồi ký Điện Ảnh*. Nhà xuất  
bản Văn Nghệ thành phố Hồ Chí Minh
- Hoàng Xuân tuyền, soạn (1997) *Nguyễn Trãi, thơ và  
đời*. Nhà xuất bản Văn học
- Nguyễn Duy Cần (1983) *Lịch Sử Điện Ảnh Cách  
Mạng Việt Nam*. Cục Điện Ảnh(Bộ Văn Hóa)  
Xuất Bản
- Nguyễn Phúc Thành (2006) *Lịch Sử Điện Ảnh Việt  
Nam 2 Từ Giữa Năm 1975 Đến Đầu Năm  
2003*. Cục Điện Ảnh Xuất Bản
- Nhiều Tác Giả (1983) *Góp Phần Phê Phán Điện Ảnh  
Thực Dân Mới*. Nhà Xuất Bản Thành Phố Hồ  
Chí Minh
- Nhiều Tác Giả (1983) *Phim Mục (Phim Truyện và  
Phim Hoạt Hình Việt Nam)*. Cục Điện Ảnh
- Nhiều Tác Giả (1999) *Danh Mục Phim Truyện Việt  
Nam 1987-1997*. Viện Nghệ Thuật Và Lữ  
Trữ Điện Ảnh Việt Nam
- Nhiều Tác Giả (2003) *Danh Mục Phim Truyện Việt  
Nam 1976-1986*. Viện Nghệ Thuật Và Lữ  
Trữ Điện Ảnh Việt Nam
- Nhiều Tác Giả (2003) *Lịch Sử Điện Ảnh Việt Nam,  
Quyển I (từ cuối thế kỷ 19 đến giữa năm  
1975)*. Cục Điện Ảnh Xuất Bản
- Nhiều Tác Giả (2005) *Phim truyện Việt Nam  
Vietneature Films 1995- 2003*. Cục Điện Ảnh